



障害理解教育の視点を加えた新聞報道の分類と比較

初等教育コース 中島 佳愛

(指導教員 眞城 知己)

問題の所在と目的

今日、学校現場ではインクルーシブ教育システムの構築が進められている。障害の有無にかかわらず、お互いを尊重しあって生きることができる共生社会の実現に向けて、通級による指導や交流及び共同学習など、障害のある児童と障害のない児童とが関わる機会の充実が図られている。

こうした取り組みの中で、小学校の通常学級においても、疑似体験による障害理解教育が多く行われており、児童らが障害を理解するきっかけとなっている。しかし、こうした障害理解教育は特別に時間を設けて行われることが多いことから、児童の経験や学びが途切れてしまい、長期的な学びになっているととらえることは難しい。

このことから児童らが障害について日常的に考え、連続性のある障害理解教育を実現していきたいという思いを抱くようになった。それと同時に、特別な場や道具を介した障害理解教育に限らず、人々の身近にあるものを活用した障害理解教育に興味を持った。そこで、NIEの授業実践やメディア特性をふまえて、新聞を対象として選択した。

本研究では、小学校の通常学級における障害理解教育の視点を加えて実際の新聞記事を分析し、内容の特徴を明らかにするとともに日常的な障害理解教育の実現に向けた新聞の活用について考察することを目的とする。

方法

分析資料・分析方法・比較方法

分析資料

- (1) 分析対象紙: 毎日新聞、北日本新聞
- (2) 分析対象期間: 2021年8月24日から2022年8月24日
- (3) 分析対象記事: 「パラリンピック」のキーワードから得られた全ての記事

分析方法

- (1) 対象記事の件数: 「パラリンピック」のキーワード検索によって得られた記事1項目を1件とした。
- (2) 朝刊・夕刊別分類: 朝刊
- (3) 内容分類: 「パラリンピックの意義や理念に関する記事」「主に競技者に関する記事」「競技・競技結果に関する記事」「第三者からとらえたパラリンピックに関する記事」に分類する。ただし、見出しや本文の中に「パラリンピック」という言葉を含んでいるが、新型コロナウイルスや政治・外交問題に焦点を当てて報道している記事は分類対象外としている。

比較方法

- (1) 比較対象期間: 2021年8月17日から2021年9月6日
- (2) 比較対象記事: 車いすバスケットボールとボッチャに関する記事
- (3) 比較項目: 「(1)記事の内容とその記事において焦点が当てられている選手」、「(2)記事において取り上げられている選手や関係者の言葉」の2点から比較する。

結果

収集した記事

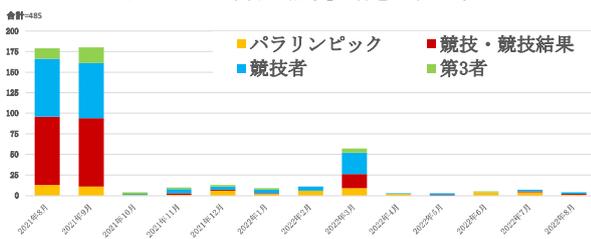
本研究では、合計915件の記事を収集した。また、分類対象外とした記事を除くと、合計485件の記事が得られた。

記事掲載面による内訳

合計915件のうち、「運動面」491件、「社会面」89件、「総合面」93件、「内政面」74件、「政治面」46件、「二面」30件、「三面」30件、「経済面」15件、「特集面」25件、「国際面」8件、「芸能面」3件、「家庭面」7件、「文化面」11件、「読者面」11件、「解説面」2件の記事を収集した。

記事の内容分類項目による内訳(図1)

合計485件のうち、「パラリンピックの意義や理念に関する記事」60件、「主に競技者に関する記事」189件、「競技・競技結果に関する記事」190件、「第三者からとらえたパラリンピックに関する記事」46件を収集した。



「パラリンピックの意義や理念に関する記事」の特徴と活用場面(表1)

これらの記事は、開会式・閉会式の後に掲載されている。また、記事の内容としては、年代を問わず主に私たちの社会と関連付けて報道されていることが多いことから、パラリンピックについて限定的に知るだけではなく、社会とのつながりも意識できる。そのため、歴史学習や、現代社会の仕組みを学び、今後の社会像について考える学習の中で活用できるのではないかと考えた。

記事が伝える主な内容	記事の引用
パラリンピックの歴史	「開会式は、第二次世界大戦下のリハビリだった。『64年の東京大会で優勝して呼ばれた』『リハビリは、88年のソウル大会から正式名称となった。』(8月25日頁)
パラリンピックの意義	「日本は今後、少子高齢化が進む。障害者に配慮した『バリアフリー』対策などの指づくりは、子どもたちや高齢者のためになる。能力を最大限に発揮し、限界を超えていく『アスリート』の挑戦に学ぶことも期待したい。(8月25日頁)
開会式でのパフォーマンスの意味	「テーマは『WE HAVE WINGS(私たちに翼がある)』。大会を通してパラリンピアンたちがはばたく期待が込められた。』(8月25日15頁)
大会と共生社会の実現	「多様な光が集まり、共生社会を築るすべからなければと願いが込められたと見られた。』(8月25日29頁) 「選手たちの活躍は大会ビジョンである『多様性と調和』の扉さびに気づかせてくれた。』(8月25日5頁)

「競技・競技結果に関する記事」の特徴と活用場面

これらの記事は、大会開催期間の13日間で毎日掲載されている。また、記事の内容としては競技紹介や競技結果等、競技について理解するきっかけとなったり、客観的に出来事を捉えられたりするものが大部分を占めている。そのため、児童が授業の中で行う競技と関連付けてパラスポーツを紹介したり、記事から得た情報と映像資料とを組み合わせて実際にパラスポーツを行ったりする活動に活用できると考えた。

「主に競技者に関する記事」の特徴と活用場面

これらの記事は、「競技・競技結果に関する記事」と同様に、13日間で毎日掲載されている。また、記事の内容としては、競技結果について詳細に報道されており、ほとんどの記事で選手自身の言葉が取り上げられている。そのため、パラスポーツの記事の組み合わせで競技について知ったり、児童らが関心を持った競技や選手を紹介したりする活動、そして記事に取り上げられた言葉から、選手が抱えている思いについて考える活動ができるのではないかと考えた。

「第三者からとらえたパラリンピックに関する記事」の特徴と活用場面(表2)

これらの記事は、大会開催期間にわたって掲載されている。また、記事の内容としては、パラリンピックについて幅広い視点から報じられており、競技を観戦する際に注目する点やパラリンピックに対する考え方を新たに得られるものが多い。そのため、新聞記事に対して自分の意見を書く活動やパラスポーツを複数の視点から観戦するという活動に生かすことができると考えた。

第三者の視点で述べられている主な特徴記事(記事名)	記事の引用
奈良新聞(8月15日)『伊勢新聞(7月29日)』	「私も取材では、障害や障害者の特徴とつきり見て伝えることを心掛けています。どんな障害があるかわからないと人々の理解や共感が見えにくい。知って初めて選手の手ごもります。』(8月25日29頁)
「開会式、閉会式 毎日新聞(8月25日) 佐木 隆人(記者)」	「『ブラス』(ダンス)。私は聞き流しに音をかきつけた。横に落ちる音響効果から『イヤホン』(ヘッドホン)で選手が聞いてくれていることがわかった。』(8月25日29頁) 「開会式は点字ブロックが敷き詰められ、手すりがあれば、視覚障害者や高齢者の絶対的数値コースになるはずだ。点字を読むのが難しい視覚障害者には、音声案内が頼りになる。』(8月25日29頁)
パラスポーツからの観戦(朝日新聞(8月25日))	「開会式の入場行進は、それぞれの国の選手たちの多様性が見て取れる。ファッションショーのランウェイのようだった。これまで夏を合わせて11回の開会式を見てきたが、東京大会が今までで一番、ランウェイと化した開会式だった。』(8月25日18頁)

毎日新聞と北日本新聞の記事の比較から明らかになった特徴(表3)

	毎日新聞	北日本新聞
発行地域	全国	富山県
記事の掲載日	・試合が行われた次の日 ・注目されている試合がある日 主に「	・試合の有無に関わらず毎日
記事の中心となる内容	・試合の結果 ・試合の現れや印象的な場面とそこで活躍した選手	主に「 富山県出身の選手
事実と価値の関係	事実から報道する内容、選手へ	報道した内容、選手から事実へ
特徴的な言葉	大会理念に関する言葉	選手の言葉

考察

本研究で行った新聞記事の分類や比較から明らかになった特徴から考えたことをもとに、(1)と(2)の項目を立てて述べる。

(1) 毎日新聞の分類から得た気づきと新聞に期待する役割

記事掲載面による分類を通して、運動面に掲載されている記事の総数は社会面に掲載されている記事の総数の5倍以上もあったことが分かった。これは、パラリンピックがリハビリを目的に行われている大会ではなく、アスリートの大会として社会に幅広く認知されていると言える結果ではないだろうか。数多くあるメディアの中でも新聞は、全ての事実を活字で伝えるという特徴を持っており、それは事実を記録として残していくという長所の一つだとも考えられる。そのため、新聞は事実を活字で伝えるという特徴を生かして、現在起きている出来事に限らず、さらに幅広い分野でその出来事を伝え続ける役割を担ってほしい。

(2) 障害理解教育に新聞を活用することについて

「パラリンピック」のキーワードで得られた記事が障害者に関する記事の大部分を占めていることを考慮すると、夏季大会や冬季大会が開催されない年には障害者に関する報道そのものが減少すると考えられる。また、本研究では毎日新聞と北日本新聞の記事を比較したが、この2社の中で本報の伝え方に特徴があることが明らかになった。そのため、新聞を障害理解教育へ活用しようとする際には、日々複数の新聞紙から記事をスクラップしておく必要があると言える。また、本研究で考えた新聞の活用例では、活字で情報を伝えるという新聞の特性上、文字を「読んで」、写真を「見て」という方法がほとんどとなってしまった。そのため、文字を読むことが苦手な児童や新聞の書体が読みづらい児童への対応について、今後具体的に考えていく必要がある。

主要文献

- ・妹尾彰・枝元一三編著(2008)『子供が輝くNIEの授業 新聞が育む人づくり教育』晩成書房
- ・徳田克己・水野智美編著(2005)『障害理解 心のバリアフリーの理論と実践』誠信書房